



右/玄関ホール。この家の空間構成要素——白でまとめた壁、天井、タイルの床、造り付け家具、そしてガラスとそれを支える木材——のすべてがここにあり、ここからさりげなく展開されていく。左/使えるものは残し、生かす。再利用・リサイクルできる建材を使う。そうでなければ、エネルギー改修する意味がない。ミズナラ無垢材の階段は補修してそのまま使われることになった。踊り場と2階全フロアにはあたたかみのあるカエデ集成材が張られた。



右/2階浴室。シャワー・ブース手前の桁の位置までがバルコニーだった。床暖房と壁取り付け温水循環ラジエーターを設置。屋内からは見えないが、窓の両サイドに25mm厚の真空断熱パネルとホウロウ引きガラスがはめこまれ、外観アクセントとなっている。左/3層ガラスに屋内側はカラマツ材、屋外側はアルミニウムの枠の窓は省エネルギー住宅のスタンダードになりつつある。金具も含めた枠の構造がものをいう。ドイツでは、ガラスが複層でも3層でも価格はそう変わらない。



上2点/日射取得と同時に、その遮蔽も建築計画上の重要テーマ。ヒルドさんの家のファサードには、自動でも手動でも操作できる外付けジャルジーがめぐらされている。ジャルジーボックスは熱橋対策のために外壁の裾の中にインテグレートされている。

を敷いた南面テラスのオーニングは室内の日射遮蔽の役割も兼ねる。階段の一部を除いて、この家には段差がない。



3か月で工事完了。換気システムは、熱損失の最小化と屋内気候条件の最適化のために、冬の間は「窓の開閉厳禁」タイプである。朝起きたとき、まず空気の入れ換えをしたいと思わないのだろうか。閉め切ったままで掃除機をかけるのに抵抗はないのだろうか。

も3カ月も待たされる。2000ユーロから、場合によっては8000ユーロも申請料にかかってしまう。もったいないでしょう、と。エネルギー関係以外の多くは施工主の意向と嗜好を優先する。建物外観のイメージに大きくかわかる窓枠の色もお母さんが「これ」と指定した。

一度は通ってきて、工事を監視した。お母さんはケーキを焼き、コーヒーをいれて、建築家や親方たちとの会話をたのしんだ。大工さんのお三時が習わしとなっている日本とは異なり、ドイツではめったにないことだった。「天からの贈りもののような」(ヒルドさん) 既存住宅のエネルギー効率改善を対象とする公的融資を受けられることもできた。金融機関の電話に出た女性に、応募締め切りは明後日ですよ! とせかさされ、大慌てで揃えた書類だったが、なんとなく審査にパスした。ひとつはパーセント、もうひとつは1・85パーセントという有利な条件の利子。太陽熱給湯や暖房設備、建築家の報酬に対しても補助金が出た。工事中、ヴィマーさんはその場

ながら、ヴィマーさんは言った。「建物は生き物のようなもの」……はっと思い当たる。肺や心臓の働き、血液や酸素の体内循環、体温調整、そんな、ふだん意識することのないからだの働きと建物の機能が重ね合わさる。住まいの中に

ヒルドさんは言う。「いや、私も同じことを心配していましたが、良さの実感と慣れ、ですね。戸外よりもクリンで新鮮な空気が適温でうちのなかを満たしているのが感じられるんですよ。埃や花粉などが入ってこない。湿気や匂い、音も気にならない。それに、屋内のドアはどれも開け放しておける。明るく、ゆったり。快適です」。

ドイツ連邦交通・建設・都市計画省とエネルギー性能向上推進機関が主催する「効率住宅」コンペの戸建て住宅改修部門・全国ベストスリーに選ばれた。施主、建築家、職人たちのいかに手による協同作業が獲得した賞である。

ヒルドさんの家は、2009年、ドイツ連邦交通・建設・都市計画省とエネルギー性能向上推進機関が主催する「効率住宅」コンペの戸建て住宅改修部門・全国ベストスリーに選ばれた。施主、建築家、職人たちのいかに手による協同作業が獲得した賞である。

その場で平面図や断面図を手描きした。「新築のときはコンピュータを使うけれど、改修工事というのは、現場の状況次第で、プランを見直しながら、ぴしゃりぴしゃりと決めていくもの。手描きのスケッチで進めるほうが話が早い」

施主のDr. ハンス=ペーター・ヒルドは腎臓疾患の専門医。国内外を飛び回る毎日だが、工事中は時間を工面してはそのプロセスを写真に撮って記録した。



からだという。「サンルームを」という施主に対して「ガラス張りで行きませんか」と代替案を練った。そこにもヴィマーさんらしいワケがある。サンルームにするとは建築確認が必要だ。そんなことをしていたら役所の手続きで2カ月